

別冊

# おいしだものがたり

～資料館資料編～

## ■『六曲一双 源平合戦図屏風』

『日本遺産「山寺と紅花」追加認定記念企画展  
大石田に遺る近世絵画』展より



10月26日(土)から資料館では、『日本遺産「山寺と紅花」追加認定記念企画展 大石田に遺る近世絵画』展を開催いたします。今回はこの中から『六曲一双 源平合戦図屏風』をご紹介します。

平安時代末に起きた治承・寿永の乱は、『平家物語』や『吾妻鏡』によって江戸時代には人気のモチーフとなり、「源平合戦図」として絵巻や屏風にさかんに描かれました。形状の性質上、絵巻形式では各場面がクローズアップされるのに対し、屏風の場合は俯瞰的に描写されることになります。特に二隻で一对(一双)の屏風形式では、この乱のハイライトである一ノ谷の合戦と屋島の合戦をセットで描くものが多く現存しています。義経による鶴越の逆落しや那須与一の扇的といった、わかりやすい名場面が豊富なこの二つの合戦を左右に配した六曲一双が「源平合戦図屏風」の典型です。

本作もそのような源平合戦図の一類例といえますが、一ノ谷の合戦のみを左右隻に描いているという特徴があります。右隻中央には平家が福原の陣を構え、その周囲には義経ら源氏の兵士たちが描かれます。ただし、単に同一の時間軸で俯瞰的に切り取っているわけではなく、今まさに山を駆け下りる場面、奇襲をかけた場面、交戦している様子などが時間の経過を追って描かれています。一つの画面(屏風)に複数の異なる時間を描く、いわゆる異時同図の手法により、物語を読むように鑑賞する仕掛けが施されているのです。さらに、左隻へと時が移ると、平家敗走の場面です。熊谷直実と平敦盛の愁嘆場のやや上方に目を向けると、画面外に設定された沖の方へと逃れる平家の船があり、これから起こるであろう屋島の合戦を予感させるように、屏風による物語は終わります。

上記のような屏風による物語のそれぞれの場面は、“すやり霞”という雲のようなもので区切られています。この霞は大和絵特有の場面転換装置で、多くは金箔や金泥、あるいは胡粉の白で表現されます。しかし本作では金箔と銀箔を散りばめた青雲となっている点が特徴的です。金を用いるのに比べて華やかさに欠けるものの、金では埋没しがちな内部の様子をより際立たせるという効果を発揮しています。この屏風には落款等はなく、作者や年代は不詳です。ただし、絵の雰囲気や人物の描き方から狩野派のものに類似しており、恐らく江戸時代中期以降の狩野派系統の絵師によるものだと考えられます。

江戸から明治にかけて最上川舟運で発展した大石田には、近世絵画の優品が多く遺っており、その内容も充実しています。今回ご紹介した屏風以外にも、多くの作品を展示しておりますので、この機会に是非ご覧ください。

『日本遺産「山寺と紅花」追加認定記念企画展 大石田に遺る近世絵画』展は12月8日(日)まで



### 町の人口 令和元年10月1日現在

世帯数	2,330戸	(+2)
総人口	6,985人	(-13)
男	3,429人	(-7)
女	3,556人	(-6)

#### (9月中の異動)

出生	1人	転入14人
死亡	15人	転出13人

※この数字は外国人数も含めた数字です。

### 楽がき帳

中旬ごろから朝晩一段と寒くなつて、秋が深まったというより一気にな冬が近づいてきたような中、暖房もつけずに過ごしてちょっと風邪気味です。毎年そんなことを言っている気がしますが。

今年も栗が豊作なのでしょうが、食卓に何度も栗ご飯や茹で栗が上りました。ほんのり甘くておいしい、秋になったなあと感じる果物です。茹で栗をほじくっていると虫が入っていることがあります。調べてクリシギゾウムシの幼虫だそうで、地域によっては調理して食べるところもあるようです。1匹だけでなく3〜4匹がひとつの栗の中に入っていることもあります。よくこんな小さなところに、狭いところが苦手な私には考えられない。何匹か栗と一緒に食べてしまいました。味も食感もちよつとなあ。(あ)